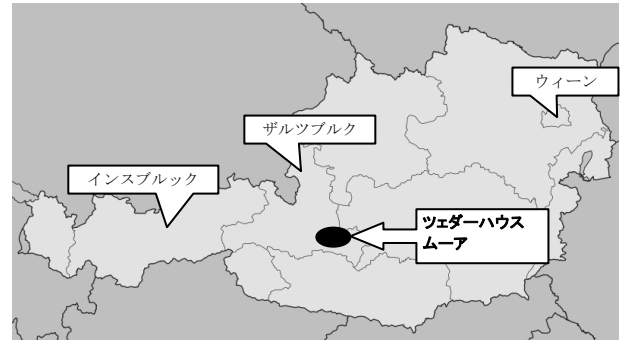


# アルプス地方の花祭り

2011年5月21日 朝日カルチャーセンター立川 岡部由紀子

## アルプスの花で飾られた柱 (Prangstangen)

ドナウ川の支流ムーア川の源に古くから伝わる花祭りを守る山村がある。オーストリア・ザルツブルク州の南東の端にあるムーア (Muhr)だ。北側の谷にある村、ツェダーハウス (Zederhaus)でも同じような巨大な花柱を掲げた練り歩きが見られる。周辺の地域では、いまでは花の代わりにウールの糸を使う。



ムーア：住民 580 人、広さ 115.96km<sup>2</sup> (1km<sup>2</sup> に 5 人)、標高 1107m  
ツェダーハウス： 住民 1196 人、広さ 130.55km<sup>2</sup> (1km<sup>2</sup> に 9 人)、標高 1205m

### どのような祭か

高さ 6～8メートルのトウヒの柱を山や家の周囲で採集した花で飾り、未婚の青年が交替で花柱を掲げて、カトリックの聖体行列の先導をして村を巡行する。行列の通る道にはシラカバの枝が飾られ、4箇所に設けられた祭壇の前で祈りがあげられる。村人は晴れ着をまとって夏の陽光を浴びて行進する。巡行を終えた花柱は教会に奉納され、8月15日のマリア昇天祭まで教会を飾る。マリア昇天祭のミサでの清めのあと花柱は解体され、村人は花を家に持ち帰り、クリスマスイブ、大晦日、公現祭の前夜に家や家畜小屋を燻すときに使う。



### いつ行われるか

ムーア：6月29日 聖ペテロと聖パウロの祭日  
ツェダーハウス：6月24日 洗礼者ヨハネの祭日 (夏至)  
ウールの飾り柱を用いる所の多く：聖体祭 (移動祝日 2011年は6月23日)

### 花の飾り柱はどのように作られるか

6月中旬から：村の周囲やアルプで特定の花を採集する。5万個の花  
祭の3日前：花の茎や藁を芯にして、束ねた花を麻紐で縛って花の紐を作る。  
祭の2日前から前日：トウヒの柱に花の紐を巻き付けて、釘で固定して対称的な伝統文様を作る。  
柱の先に五葉松の枝と、マリア像、聖体などのシンボルをつける。(ムーア)  
柱の重さは80キロにもなる。前日の夕方、花柱は教会へ運び込まれる。

### どのような花で柱を飾るか (写真参照)

白 マーガレット  
青 リンドウ、ヤグルマギク  
黄 ハゴロモグサ セイヨウミヤコグサ アルニカ ニオイアラセイトウ タビラコ  
赤 ナデシコ シャクヤク  
緑 コケモモの枝葉 ハゴロモグサの葉 五葉松の枝 トウヒの枝

## 民間薬や魔よけとして利用された植物

- ハゴロモグサ … 婦人病 傷 下痢 葉にたまる露は女性を若返らせる  
ヤグルマギク … 炎症 アキレスの傷を治した  
アルニカ … 夏至の前日の宵、畑の周りに花束をさして、麦を倒す霊から畑を守る。  
リンドウ … 夏至の夜明けに金のスコップで掘り出すと愛の妙薬となる。  
根は、怪我や家畜の疫病、魔術や犬に噛まれることを予防する。  
シャクヤク … 黄疸 腎臓疾患 痛風などに効くとして修道院で栽培された。  
乾燥した花 … 燻した煙は、災いや病気から家畜や人間を守り、恵みをもたらす。



## イナゴ除けの祈願が発端ともいわれる

伝承によれば、14世紀イナゴが襲来し、すべての草木が食い荒らされたとき、マーガレットだけが残った。裸の木をマーガレットで飾り、二度とこのような災いに襲われないように祈願し、毎年花で飾った棒を奉納することを誓った。始めは牧草を干す棒に花を飾って畑や野を巡行した。日本の「虫送り」の行事と類似



イナゴの襲来 … 他の動物や虫による災禍とは区別され、終末の到来と恐れられた。

聖書の記述：出エジプト記 10章 12-19節 ヨエル書 1章 4節 ヨハネの黙示録 9章 1-10節

## 聖体行列とはどんな行事か

最後の晩餐 … キリストは、パンと葡萄酒をそれぞれ「自分の体」「自分の血」として弟子たちに与え、「これをわたしの記念として行え」と命じた。→ 聖体拝受（聖餐）がミサの中心となる。

聖体拝受 … パンとワインがミサの中で「聖変化」し、キリストの体と血になり、それを信徒がわけあう。「犠牲の供え物」という意味をもつ無発酵パン（ラテン語 *hostia* / ドイツ語 *Hostie*）  
神の見えない恩寵を具体的に見える形であらわす儀式 = 秘蹟（ラテン語 *sacramentum*）

聖体祭（ラテン語 *Corpus Christi* ドイツ語 *Fronleichnam*）

秘蹟としての聖体、パンの形をとったキリストの御体に対する崇敬と感謝を表現する祭り  
聖体が入った聖体顕示台（*Monstranz*）を掲げて厳かに歩く聖職者に従って人々が行列  
13世紀始め、聖ジュリアヌヌに現れた月に暗い線が走る幻視 → 聖体を祝う祭日の制定  
カトリック教会では1264年以來、聖霊降臨祭の10日後に祝われるようになった。



## 宗教改革と反宗教改革

16世紀の宗教改革期以降、プロテスタント教会では聖餐は象徴的な儀式とされた。  
ザルツブルク大司教の領内でもプロテスタント勢力が強まり、聖体祭の巡行は公的行事からはずれる。  
反宗教改革を推し進めるため、カトリック教会は聖体祭を華やかに演出して、民衆を惹きつけた。  
→ 花の飾り 音楽隊の演奏 礼砲 兄弟団や職人組合などが旗を先頭に行進 晴れ着の住民  
聖書や伝説にでてくる人物の仮装（サムソンなど） マリア像などの彫像 受難劇の上演

18世紀末の啓蒙主義の時代、聖体祭の豪華絢爛な行列や見せ物、演劇的な要素は禁じられた。

厳かな聖体の行列と、楽しい見せ物が登場する祭を分けて行うようになる。

ムーアでは、聖体祭の巡行は午前中に行われ、午後は賑やかにサムソンの人形の練り歩きが行われる。

## 土着の民間信仰に接ぎ木されたキリスト教の祭日

復活祭（春分後、最初の満月の後にくる日曜日と月曜日、2011年4月24/25日）

古代ゲルマンの光と春の女神「オステラ」、蘇る若々しい太陽を祝う祭



Ostera

聖霊降臨祭（復活祭から7番目の日曜日と月曜日、2011年6月12/13日）

古代ゲルマンの夏の到来を祝う祭

シラカバやモミの若枝を窓にかざる。若葉で全身を覆った夏の精霊

聖体祭（聖霊降臨祭から10日後、2011年は6月23日）

行列が通る道に花を撒いたり、花びらで模様を描いたり、家を花や若枝で飾る。

畑地を巡り実りつつある作物への祝福を願う予祝行事 豊穰祈願

シラカバの枝 … 遅霜や雹から作物を守る力 豊穰と愛の女神フレイヤの象徴



Freya

聖ヨハネ祭（夏至 6月24日）

火をつけた輪を転がす。（ケルトの風習）、山上で大きな焚き火をして歌い踊る。

悪い精霊がうろつく。→ 麦の収穫前の時期、天候が荒れたり虫の害が増えたりする。

よい精霊も訪れる。→ 牧草を肥えさせ、薬草の効力をつける。

マリア昇天祭（8月15日）

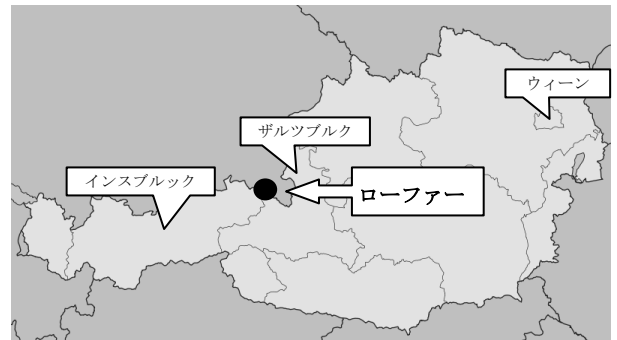
植物が成熟し薬草の成分が強まる。→ 薬草の採取 フレイヤを讃える古代ゲルマンの収穫祭

キリスト教会はこの習俗を禁じたが、マリアの祭日とし薬草の花束を清めるミサを行うようになった。

この花束には、病気、悪天候、災い、雷から人間、家畜、家を守る力があると信じられている。

## 薬草の花束の潔め（Kräuterweihe）

ザルツブルク州の北西部ドイツ国境に近い地域では、8月15日民俗衣装に身を包んだ女性達が、大きな花束を抱えて教会に集まる。色とりどりの花を巻きずしのようにぎっしりと巻いた花束には、山の放牧地のアルプから摘んできた薬草や香草が入っている。ザーラッハ川沿いの町、ローファー(Lofer)では直径30~70cmもある花束が所狭しと教会の祭壇の前に並べられ、ミサでの潔めを受ける。



ローファー：住民1918人、広さ55.63km<sup>2</sup> (1km<sup>2</sup>に34人)、標高626m

どのような花をいれるか

ノコギリソウ、オレガノ、ペパーミント、フジバカマ、ビロードモウズイカ  
キオン（オトギリソウの代役）、カミツレ、ナナカマドの実など

太陽をいっぱい浴びてアルプを彩る花々は、家畜や人間を健康にする力を秘めている。その恵みを美しい祭で讃え、厳しい冬にもその活力を享受しようとする。そのような山の民の想いがこめられたアルプス地方の花祭り。





## 付記：ムーアでは花祭の午後、サムソンの練り歩きが行われる。

旧約聖書・士師記 13～16 章抄訳

イスラエルの民がペリシテ人に支配され、苦しめられていたころ、**ダン**族の男マノアの妻に主の使いがあらわれる。彼女は不妊であったが、子供が生まれることが告げられ、その子は神にささげられた者（**ナジル人**）であるため、次のことを守るよう告げられた。それはぶどうの木から産するもの、酒、汚れた食物をいっさい口にしない、頭にかみそりをあて、髪を切ってはいけないということだった。こうして生まれた子がサムソンであった。

サムソンは神に守られ成長し、神の霊がしばしば彼に臨んだ。長じた後、あるペリシテ人の女性を妻に望み、彼女の住むティムナに向かった。その途上、主の霊がサムソンに降り、目の前に現れたライオンを子山羊を裂くように殺した。婚礼の宴のために再びティムナに向かう途中、サムソンは自分の殺したライオンの中に蜂蜜がたまっているのを見た。宴席で、サムソンはペリシテ人たちに「食べる物から食べる物がでてきた。強い物から甘いものがでてきた。」という謎かけをし、衣を賭けた。ペリシテ人は女から答えを聞きだし答えた。サムソンは祝宴から飛び出し、**アシュケロン**で 30 人のペリシテ人を殺害してその衣を奪い、謎を解いたペリシテ人たちに渡した。ティムナの女の父はこの一件の後、娘をほかの男性に与えた。サムソンはこれを知り、300 匹の山犬の尾を結んで、それぞれに一つずつ松明をむすびつけ、畑などペリシテ人の土地を焼き払った。ペリシテ人はその原因がティムナの父娘にあると考えて二人を殺したが、サムソンはこれにも報復してペリシテ人を打ちのめした。ペリシテ人は陣をしいてサムソンの引渡しを求め、ユダヤ人はこれに応じた。ペリシテ人はサムソンを連行したが、主の霊がサムソンに降ると縄が切れ、サムソンはロバのあご骨をふるってペリシテ人 1000 人を打ち殺した。

当時イスラエルには王はなく、主から指名された士師が危機の折には統率者となった。サムソンは二十年間、士師としてイスラエルを裁いた。その後、サムソンはペリシテ人の**デリラ**という女性を愛するようになったため、ペリシテ人はデリラを利用してサムソンの力の秘密を探ろうとした。サムソンはなかなか秘密を教えなかったが、とうとう頭にかみそりをあててはいけないという秘密を話してしまう。デリラによってサムソンは頭をそられて力を失い、ペリシテ人の手に落ちた。彼は目をめぐり出されて、**ガザ**の牢で粉ひきの労働をさせられた。

何年かがたって、サムソンの髪はのびはじめた。あるときペリシテ人の首長たちが**ダゴン**の神殿に集まった。彼らはサムソンを引き出して見世物にした。サムソンは神に祈って力を取り戻し、寺院を支えている二本の柱に体重をかけてそれを倒し、3千人のペリシテ人を道連れにして死んだ。

